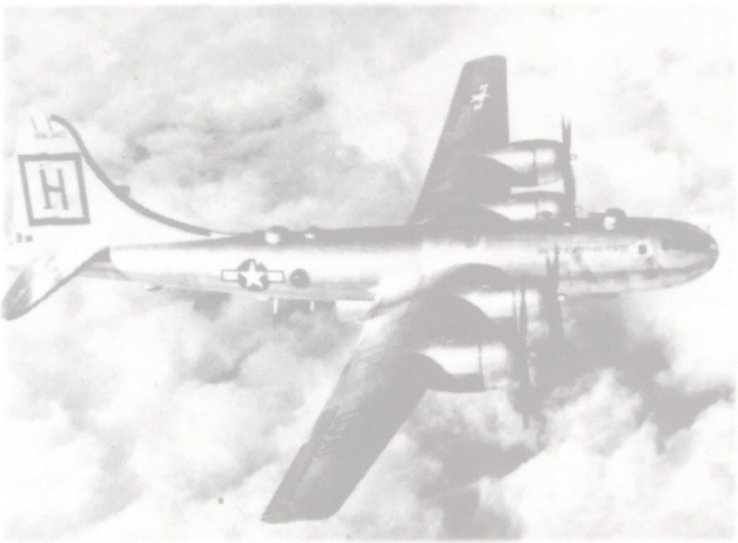
開府500年を学ぶ No.10

戦争と甲府空襲

昭和16(1941)年12月8日、日本軍がハワイの真珠湾にあったアメリカ軍の基地を奇襲攻撃し、太平洋戦争が勃発しました。

昭和20年7月6日、人々が七夕祭の準備を終えてねむりにつく頃、甲府には町を焼き払うための爆弾(焼夷弾)が雨のように落とされ、市街地の65%が被害を受け、1,127人もの命が奪われました。これが『甲府空襲』です。

しかし翌7日付の山梨日日新聞号外では、『焦土から断乎起て』『食料は大丈夫』などの見出しで、山梨県知事自らが災害復興を促す「知事布告」を出しています。そして大きな被害にも負けない、甲府市民の努力によって復興をはたしました。



爆撃機

空襲の記録

死者1127名

富士川地区	74名	琢美地区	191名	相生地区	112名
新紺屋地区	16名	湯田地区	427名	穴切地区	41名
春日地区	25名	朝日地区	40名	伊勢地区	43名
貢川地区	3名	国母地区	12名	里垣地区	23名
相川地区	8名	市外	82名	住所不明者	30名

飛来し空襲したB29　131機

投下した焼夷弾の総重量　970.4トン

空襲後の甲府中心部

掲載画像出典　甲府空襲:甲府市『写真集 甲府物語』、爆撃機:甲府市教育委員会